

東京からデンバーへ

塚田 幸子

東京の下町から米國コロラド州デンバーに移つて四か月、ようやくこの間の事を振り返つてみるゆとりの出てきたこの頃です。我が家は四人家族、夫と小学二年の長女、美雪、三歳の次女、直美、そして私です。

長女は当地に着いて二週間ほどで、パブリックスクールの二年生に入り、スクールバスで通っています。幼稚園から三年生までの小学校で、黒人街にあるため、生徒の六割から七割が黒人です。そのことを心配して私立を捜した方がよいと忠告して下さる方もありましたが、とにかくこの目で見てからとの思いで出かけてみることにしました。校長先生にお会いしてお話を伺う内に安心し、必要書類を提出し、手続きをすませると、校長先生は長女の手を引いて教室やトイレを案

内し言葉の先生や担任の先生を紹介して下さいました。

翌日から来なさいとのこと、果たして大丈夫なものかという両親の心配と、彼女自身の言葉がわからないのにどうしたらいいのだろうという不安とで、バスを待つ間、両親も彼女も極度に緊張した不安な表情でいたように思います。名前と教室番号、バスの番号等書いた大きなカードを首からさげて、やって来たバスに同じ住宅から五、六人が一緒に乗って行きました。聞いていた時刻にバス停まで迎えに行つて、長女が元気に降りてくるとホッと私は尋ねました。「どうだった?」「とっても楽しかった」という答えが返ってきてびっくり、詳しく尋ねるところでした。

バスから降りると校長先生が長女を迎えに出て下さつていて、校庭や教室へ案内して下さつたとのこと、教室を移動する時や、トイレ、食堂へは両方から二人の級友が手を引いて連れ歩いてくれたということ、休み時間にも色々な遊びに次々と誘つてくれて自分からは何もしなくても心配する暇もなく楽しく過ごせたとのこと、ひと言もしゃべらないのに級友の方から名前を覚えてくれて友だちになつてくれたとのこと、私は感心することしきりでした。とにかく「楽しい」「休みたくない」と今も言い続け、元気に通っています。少

し慣れた頃、うるさくしていて全員が先生に叱られ、長女だけほめられたという話を聞きましたが、彼女はその時ちよっぴり涙ぐんで言いました。「先生に叱られても、みんなと好きなだけおしゃべりできた方がいい」と、おぼろげに相手の話がわかるようになり、少しは読み書きもできるようになって、ほんの片言をしゃべり始めた長女です。得意の絵や工作、折り紙で、足りない言葉を補い、コミュニケーションする様子はほほえましく、家に帰ってから行き来する友だちもできています。

三歳の次女の方は、真先に覚えた英語が「スクールバス」で、バス通学の長女をうらやましていますが、母と二人きり、取り残されたように感じて寂しいのでしよう。冬のデンバーでは外に出ても人の姿を全く見かけないことの方が多く友だちの沢山いた東京の生活を思い出し、泣きたいような気持ちになったのは私も同じでした。次女は日本にいた頃の友だちの名前をあげて「○○ちゃんはどこにいるの?」「××ちゃんはどこへ行っちゃったの?」と私に尋ねました。その前には「早くおうちに帰ろうよ」と言って、「ここがおうちなのよ」と言われ、悲しそうな、不思議そうな顔をしています。飛行機に乗ってアメリカへ行くことを喜んで、得意そ

うにふれまわっていた次女は、父親の出張の時のような短期的な旅を思い描いていたようです。

次女は、日本で言えばようやくこの四月に三年保育の幼稚園に入るところ、まだ早いように思っていました。友だちのいないことを思って、今は近くのデイ・ケア・センターやプレ・スクールと名の付く所を捜し歩いています。デイ・ケアは日本流に言えば保育所ですが、中身はいろいろで、たいていはプレ・スクールを含んでいます。プレ・スクールも週1回、2回、3回、毎日と自由に選べますし、午前中だけ、昼食まで、丸一日と時間もいろいろ選べます。プレ・スクールというのが日本の幼稚園に近いように思いますが、キンダーガルテンというのもある。こちらは、どちらかと言うと小学校のイメージに近いと考えた方がよいようです。こうして見て歩くこと自体が、今では春の訪れと共に楽しみとなり次女も私も救われたように感じています。

